

東京の教育

復刊第一号

東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三〇

「東京の教育」復刊に際して

先にお知らせしましたように、長年休刊に致しておりました「東京の教育」を、この度復刊することに致しました。

以前事務局で御尽力下さった林田孝先生、朝比奈正幸先生、また前会長の田中館貢橋先生が相次いで帰幽され、その後事務局が現職教員一人となり、発行することが困難となり今日に至りました。

しかし、一番の問題は、学校種を問わず、学校五日制が導入されてからは日々の勤務時間が却って長時間化し、そのため定例研修会が開かれないままでは、会員間の結びつきが失われ、やがて会自体の存在意義が問われ、解散せざるをえなくなるかもしれません。

しかし、東京都教師会は日本教師会の中心的存在として、設立以来長年にわたって我が国の教育正常化の為に大きな活動をしてまい

りました。そのような先輩諸先生の遺志を継承するためにも本会の活動を継続しなければならぬ。その為には会員の結びつきを確認する何らかの手段が必要です。それにはかつてあつた機関紙を復刊させることが第一ではないか。そこに教育実践報告や教育に関する御意見・御見識を披瀝して頂き、それらを共有財産として、自らの教育活動、退職後の社会活動に活かして頂く。また地方支部や友好団体とも交流・連携しながら、我が国の教育改善のために尽力する。

このような思いから、「東京の教育」の復刊を決意した次第です。会員各位の御支援・御協力をお願い申し上げます。

平成二十九年一月吉日

東京都教師会会長

佐藤 健二

「学問第一の心」

佐藤 健二

家に届いた明治神宮の機関誌「代々木」平成二十九年一月号を読んでみると、明治神宮の杜づくりを主題に小説『落陽』を書いた

作家「朝井まかてさんに聴く」といふインタビュー記事が載つてゐた。取材の苦勞をお話しされてゐる中で夏目漱石に触れてゐるところがあつた。それは明治天皇崩御に関してだ。漱石が『こゝろ』の中で、崩御を機に先生が自殺を決意するところで「明治の精神に

殉死する」といふ有名な言葉を使ったことはよく知られてゐる。しかし、まかてさんは、崩御に関する漱石の言葉としては『法学協会雑誌』(大正元年八月一日)に掲載された「明治天皇への奉悼文」が「ずっと気になつていました。一般に敷衍されている漱石の考え方、スタンスとはまるで異なる内容でしたから」と言はれてゐる。

管見ゆゑにその内容が分からず調べてみようと思つてゐた矢先、不思議なもので、十二月二十二日付の産経新聞「正論」欄に東京大学名誉教授平川祐弘先生が、同じく「明治天皇奉悼之辞」に触れて、『こゝろ』よりこちらの方が「直接胸に迫る」と書いておられたのである。有り難いことに、そこにはその文章が紹介されてゐた。

(過去四十五年間に發展せる最も光輝ある我が帝国の歴史と終始して忘るべからざる大行天皇去月三十日を以て崩せらるる

天皇御在位の頃学問を重んじ給ひ明治三十二年以降我が帝国大学の卒業式毎に行幸の事あり日露戦役の折は特に時の文部大臣を召して軍国多事の際と雖も教育の事は忽にすべからず其局に当る者克く励精せよとの勅諭を賜はる云々)。

ここで漱石は特に、如何に明治天皇が学問を重んじられてゐたかといふことに触れてゐるのであるが、この一文を読み、心に浮かんだ文章があつた。それは私が仲間と続けてゐる「みことりの」の研究会で扱つた順徳天

皇の「禁秘御抄」である。そこに「諸芸能の事」といふ一段があり、「第一に御学問なり。夫れ学ばざるときは、則ち古道に明らかならず。而も政を能くし太平を致す者、未だ之有らざるなり……誠に鴻才までは然らずとも、浅才は見苦しき事なり。……必ず必ず学ばべし」と書かれてある。

明治天皇が学問を重んじられたのは、当にこの様な伝統に立つ皇統あるがゆゑであり、維新後短期間で西欧に追いつくことができたのも天皇を中心としたこの学問尊重の伝統があつたからであらう。

今日天長節の佳き日に、私は皇居一般参賀の大行列に加はり、日の丸の小旗うち振られるなかで今上陛下のお元氣なお声を押し、居並ぶ皇室の方々が皆それぞれ学問の道に精励されてゐる事を想ひ、学問第一の良き国に生まれた喜びを新たにしたのであつた。

(会員)

『碧雲荘』騒動記

藤井雅和

東京都杉並区天沼に『碧雲荘』と呼ばれる建物があつた。昭和初期の建築で、当時のアパート建築の貴重な遺構として、建築史家には名高かつたといふ。

更にこの建物を有名にしてゐたのは作家太宰治が一時住んでゐたことである。あの『富岳百景』の冒頭で、主人公がある衝撃的な事

件のあと、便所の窓の金網から富士山をのぞむといふ場面があるが、その舞台のアパートである。

この建物の敷地の隣地が税務署で、杉並区が高齢者施設を作るためこの国有地を取得した。その際、この旧『碧雲荘』の土地も買収し施設の敷地を広げようとした。

建物は八十年経つてゐるとはいへず入れをすればまだ使用できるとされ、建築史的にも文学史的にも貴重な建物は保存され、文化施設として活用されるものと地元関係者は思ひ込んでゐた。しかし、区は建物はいらぬと言ひ出し、更地にして引き渡すやう、所有者に通告してきたといふ。

地元関係者や建築史家、文学研究者、また太宰を愛読する人々は保存運動を起し、杉並公会堂に一千人を集めて保存の必要性を訴へた。しかし、首長を始め行政の態度は頑なで、結局この運動は実らなかつたのである。

最終的には篤志家の旅館経営者が自費で引き取り、文化施設として活用するといふことで、大分県由布市由布院町に解体移築されることになつた。関係者は、とにかく消滅するよりはといふ苦渋の納得の仕方を強ひられたが、太宰や震災後の帝都の歴史とは全く縁もゆかりもない地での再建に、複雑な思ひを禁じ得ないとしてゐる。

ところで、同じ杉並区荻窪には近衛文麿の『荻外荘』と呼ばれる建物があつた。近衛内閣の政治の舞台となつたところで、元首相

自決の場所でもある。建物も伊東忠太設計の和風建築、吉田茂も一時住んだ建物である。

区はこの『荻外荘』の保存には執心し、土地建物を近衛家から買収して公園化し、更に国に働きかけて「国の史跡」に指定させることに成功した。この指定と殆ど同時に、旧『碧雲荘』は解体されたのである。

『碧雲荘』と『荻外荘』とは、同じく建築史や文化史の上で貴重な建物である。いづれも価値を認めて保存されるべきものである。しかし、政治的遺構は保存し、文学的遺構は破棄するといふ今回の遣り方は、かなり偏向的な恣意が含まれてゐるといふ感が拭へない。首長の個人的な思想や役人の無知などが関係してゐるとしたら、日本文化にとつてゆゆしき問題といへよう。(会員)

平成29年度第57回教育研究大会

期日 平成29年8月5日(土)～6日(日)

場所 大阪府教育会館「たかつガーデン」

研究主題 未定(「道德教育」に関する内容)

主管 大阪府教師会

概要は以上です。詳細は4～5月頃決定します。奮つてご参加下さい。(編集部)

◎「東京の教育」への会員の皆様からのご投稿をお待ちしています。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp